

私は2018年10月より半年間、レバノンのパレスチナ難民キャンプ内にある、ハイファ病院にて医療支援を行いました。

1948年、数百万人のパレスチナ人が故郷と家を失って、ヨルダン川西岸地区、ガザや、ヨルダン、レバノンなど周辺諸国に逃れました。以来、「故郷への帰還」を切望しながら、70年におよぶ年月を難民として過ごしています。レバノン国内には、12の難民キャンプがあり、市民権や財産権もなく、就労制限や高い失業率の中、厳しい生活を送っています。

今回私が派遣された事業は、パレスチナ赤新月社との2国間事業であり、パレスチナ難民への医療サービスの向上を目的としています。パレスチナ赤新月社は、レバノン国内に5つの病院を運営しており、これらを順番に支援していく予定です。2018年4月より、ハイファ病院での最初の医療支援活動が開始され、私は2019年3月までの1年間のハイファ病院の活動の後半部分と、2019年4月から支援が開始されたハムシャリ病院支援の導入部分を担いました。

活動を行う中で最も大切にしていたことは一緒に働いている病院のスタッフのことを知ることです。パレスチナ難民キャンプ内にある病院ですが、スタッフはパレスチナ人、シリア人、そしてレバノン人と様々です。皆違う背景を持ち、抱えている問題もひとり一人違います。医療支援は技術の提供であり、人と人とのつながりが最も重要だと感じています。相手を理解し、自分たちが「当たり前」と思っていることが当たり前でないということをまず私たちは知らなければいけません。生活は決して豊かなものではなく、そのことが仕事におけるモチベーションにも大きく影響していますし、共に働く中で難しかった部分でもありました。もちろん短期間ですべてを理解することは困難です。でも相手を理解しようとする態度は必ず相手に伝わりますし、技術支援を行うための最適なアプローチを模索することは、関係構築や、より良い支援を行ううえで重要であると信じて活動を行いました。

今回私が携わった主な活動は、救急外来におけるトリアージシステムの導入(患者を緊急度別に振り分けすること)、救急外来診療録(カルテ)の導入、プロトコールに沿った看護の実践の支援です。これまでハイファ病院では一部の患者にしかカルテは書かれておらず、



70年経過している難民キャンプの中は狭く、電線だらけ

医師や看護師が行った診療や処置の内容は残されていませんでした。記録を残すことは、診療、処置を行った証拠であり、継続した治療、ケアのために重要なことです。日赤スタッフと病院スタッフが協力して改訂した救急外来カルテを導入すると同時に、トリアージシステムも導入しました。前述したように、生活が厳しい中で働くスタッフにとって業務量が増えることは簡単に受け入れられることではありません。はじめは困難もありましたが、一緒に働く中で、声を掛け、励まし、良い患者ケアにつながった時には共に喜び、そして何より病院のマネジメントスタッフが働きか



カルテを記載する現地看護師



現地看護師長と共に記載されたカルテを評価

けてくださったことで現場に定着しました。大変な環境の中でも地域の人々のために病院を良くしたいという病院スタッフの思いの成果だと思います。このような成果が将来も残るように、マニュアルの作成や、自分達で監査と評価を継続できるシステムを病院スタッフとともに作りました。

今回の活動はハイファ病院にとっての大きな初めの一步であったと思います。2019年4月からは、活動の中心がハムシャリ病院に移りますが、定期的なフォローアップを続け、次の一步につなげられるように支援を継続していきます。

今後も支援は続きます。現場の人々の心に寄り添い、相手を理解する努力を続け、一方的な支援ではなく互いに与え合えるような関係を大切にしていきたいと思っています。



(※ 当部署のフェイスブックもごらんください)